「トゥ・ザ・ライト・エンディング」

大久保　佑馬

あらすじ

演出家助手の喜田健治（２５）は、舞台『トゥ・ザ・ライト・エンディング』千秋楽の舞台裏で想いをよせる主演女優の矢内真依子（２５）に手紙で思いを伝えようとするが、主演俳優の花岡翔平（２７）と付き合っていることを知り断念。そんな時、恋敵役の石垣渉（２９）が出演直前に体調不良で倒れてしまう。舞台の脚本は頭に入っている喜田は、演出家の塚田の咄嗟の判断で舞台上に蹴り出され、急遽代役として舞台に出演することになる。喜田がうまく代役をこなせるはずもなく舞台は本来のストーリーとは全く違うものへ変化していく。

そんな中、花岡の浮気相手である篠田奈々（２７）が舞台を見に来る。花岡の浮気の事実を知った喜田は真依子の事を諦めきれなくなり、舞台の中で真依子を花岡から奪おうとする。普段から誰にも予想できない舞台を作りたがっていた演出家の塚田（５２）も喜田の行動を面白いと思って応援することにし、本来恋敵である喜田の役を主人公に、本来主人公である花岡の役を悪役に仕立て上げる演出作戦がスタートする。

台本とは全く違う流れに真依子は戸惑うが、即興で演じていくうちに花岡が浮気をしていた事実や喜田の純粋な恋心に気付き、舞台上で演技ではないリアルな反応を見せていく。一方で悪役に仕立て上げられた花岡は焦って、真依子と喜田の仲を裂こうと邪魔を繰り返すが、それを乗り越えていく度に真依子の気持ちは喜田へと傾いていく。

登場人物

喜田健治（２５）　ＡＤ・演出家志望
矢内真依子（２５）　主演女優（青野司咲役）
花岡祥平（２７）　主演俳優（細川和雄役）

塚田幸助（５２）　監督・演出家
榎島伸二郎（３８）　脚本家
篠田奈々（２７）　花岡の浮気相手
石垣渉（２９）　助演俳優（三宅聡役）

隣の席の初老
刑事役俳優
町人役
子役
女性スタッフ１
女性スタッフ２
女性スタッフ３
男性スタッフ

○演劇ホール・舞台裏通路（夜）

せわしなく行き交うスタッフたち。

その中をペットボトルの炭酸水を持った喜田健治（２５）が歩く。

喜田Ｍ「舞台『トゥ・ザ・ライト・エンディング』。男と女が織りなす友情・愛、だがそれらは戦争という時代の波に翻弄されていく。希望を失った若者たちが選んだ運命の結末とは。ありきたりなシナリオが実際にでもそのありきたりなシナリオ。人々に感動を与え、舞台で生きる役者やスタッフ全員の生活を支えている。現代芸術はしょせん回転寿司みたいなもんだ。大衆受けするものは手の凝った五百円皿ではなく、単純で味の予想できる百円皿なのだ。そして俺はそんな安っぽくなってしまった演劇界に新たな風を」

喜田Ｍ「うぉっと。俺は演劇界に新たな風を吹かせる演出家志望の助手、喜田健治だ。ここから俺の物語は始まる」

喜田、塚田幸助（５２）の元へ到着する。

喜田「塚田さん。炭酸水買ってきました」

喜田、塚田に炭酸水を渡す。

塚田は炭酸水を受け取って、榎島伸二郎（３８）に話す。

塚田「いや、違うんだよな。俺が表現したいのはもっとこう動きがあって情熱的で、観客を引っ張っていくというか観客に考える時間を与えないで？そんな舞台だよ」

榎島「難しいですよねー。もう脚本もネタ切れというか、最近の客は目も肥えてある程度予想されますからね。あとは演出勝負っていうこともあると思うんですけど」

塚田「そこで予想できない話書くのが君の仕事でしょ。もう次回の舞台に向けて動き出さないと全員食いっぱぐれだぞ」

榎島「分かってますよ」

喜田、後ろから肩を叩かれ振り向く。
女性スタッフ1「喜田君。15分前。そこのお土産キャストに」
喜田「あ、はい」
喜田、置いてあった紙袋を取って楽屋に向かって歩いて行く。
通路には千秋楽を祝うお花が並んでいる。
喜田、『石垣渉様』と張り紙がされた楽屋の前まで来る。
扉をノックする喜田。

○同・石垣の楽屋内（夜）
ソファに寝ている石垣渉（29）。
石垣「はい」
喜田の声「失礼します」
扉が開き喜田が入ってくる。
喜田「石垣さん15分前です。あとこれ、今日届いたファンレターです」
石垣は調子が悪そうに目を瞑ったまま、
石垣「そこら辺置いといて」
喜田、紙袋の一つをそっと机の上に置く。
喜田、楽屋を出ようとするが心配そうに振り向いて、
喜田「大丈夫ですか？」
石垣、ハッとするように目を開いて起き上がる。
石垣「おう、大丈夫。大丈夫よ。いやぁ最後だからさ……今日も派手にかましてやるよ」
喜田、安心するように微笑んで、
喜田「じゃあよろしくお願いします」

○同・楽屋通路（夜）
石垣の楽屋の扉を閉めて、軽く深呼吸をする喜田。
緊張したような表情で次の楽屋へ歩く。
『矢内真依子様』と張り紙のある楽屋に着く。

喜田、自分のポケットから『真依子さんへ』と書かれた手紙を取り出す。その手紙をスッと紙袋の中へ入れる。キョロキョロとあたりを見渡す喜田。

○同・真依子の楽屋内（夜）

鏡に向かって表情を作っている矢内真依子（２５）。

扉をノックする音。

真依子「はい」

喜田の声「失礼します」

扉が開いて喜田が入ってくる。

真依子「あ、喜田くん」

喜田「あ、これ今日届いたファンレターと花束です」

喜田、花束の入った紙袋を差し出す。

真依子「ありがとう」

喜田「最後ですね」

真依子「そうだね。いろいろ大変だったけどなんとか……喜田くんはどうだった？」

喜田「大変……でしたね。塚田さんに怒られてばっかりで」

真依子「（微笑んで）ホント無理難題よくやったよ」

喜田「（微笑んで）まあ」

真依子「でも喜田くんは結局最後まで私に敬語だったね」

喜田「当たり前ですよ。キャストとアシスタントの立場は違うんですから」

真依子「私は全然タメロでもよかったのに。歳も一緒だし」

喜田「（にやけて）まあ。じゃあ今日もよろしくお願いします」

真依子「はい」

喜田、楽屋の扉を開けて、

喜田「がんばって」

真依子「おいっ」

喜田、楽屋を出て扉を閉める。

○同・真依子の楽屋前（夜）

にやけ顔の喜田。
向かいの楽屋から花岡翔平（２７）が出てくる。
花岡、喜田の姿に気付くとすかさず喜田の腕を取り、周りを気にしながら自分の楽屋に連れ込む。

○同・花岡の楽屋内（夜）
花岡に強引に連れ込まれる喜田。

喜田「ちょっちょっと」
花岡「ちょっと喜田聞けよ」
喜田「どうしたんですか」
花岡「あのな。今日千秋楽だろ？そこで俺は観客にちょっとしたサプライズを用意してるんだよ」
喜田「サプライズ？」
花岡「実はな……誰にも言ってないけど、俺と真依子付き合ってんだよ」
喜田「え！？」
花岡「シー！でな？今日思い切って舞台のエンディングでプロポーズしようってことよ！」
唖然とする喜田。
喜田「付き合ってるっていつから……」
花岡「え？まあ３か月くらい前かな。そんなことよりどう思う？すげーと思わね？今まで舞台上でプロポーズした俳優なんていねぇだろ！明日には新聞にもダーンと『花岡翔平電撃結婚！主演舞台で堂々プロポーズ』ってな！」
喜田「（慌てるように）でも、そんなこと勝手にしたら塚田さん怒りますよ」
花岡「いいんだよ。話はちゃんと完結するようにするから。最後に俺が手紙を読むシーンがあるだろ？そこをちょっと変えるだけよ。ほら」
花岡、ポケットから手紙を出す。
花岡「書いてきたんだよ。監督も納得。お客さんも満足。舞台は少しでもドラマチックな方がいいだろ？」

喜田「いや……」
喜田、紙袋を差し出す。
喜田「これファンレターです。じゃあよろしくお願いします」
花岡「おう」
喜田、足早に楽屋を出る。

○同・舞台裏トイレ内（夜）
落ち着かない様子でウロウロする喜田。
喜田「ちょっと待って。え、どういうこと？」
喜田、何かに気付いたように顔面蒼白で鏡を見て、
喜田「手紙！」

○同・舞台裏トイレ前（夜）
顔を出して廊下の様子をうかがう喜田。
真依子が楽屋から出ていくのが見える。
ソワソワと真依子の楽屋に向かう喜田。
辺りを警戒しながら、こっそりと楽屋に入る。

○同・真依子の楽屋内（夜）
慌てるように紙袋を見つけて中を探る喜田。
自分の手紙を取り出しポケットに入れる。
ゆっくりと扉を開けてそっと楽屋を出る。

○同・真依子の楽屋前（夜）
音が出ないようにゆっくりと扉を閉める喜田。
後ろをスタッフが通り過剰にびっくりする。

○同・舞台裏（夜）
立って話す塚田と榎島。
榎島「まあとにかく今日は千秋楽ですから。無事に終わったらパーッと行きましょうよ。

じゃあ僕は特等席で見物させてもらいますよ」

塚田「よく自分の舞台を何回も見ようと思うよね」

榎島「舞台は生ものですから。毎回ちょっとずつ違うところが面白いんですよ」

榎島、歩いて行く。

○同・舞台下手袖（夜）

舞台裏通路を通ってとぼとぼと下手袖に歩いて行く喜田。

喜田M「俺は裏方のたんなる助手。もちろんスポットライトがあたるような人間じゃない。だけど、希望の光が断たれるのがこんなに早いなんて。告白をすることさえも許されない俺に、光が差し込むことはもうないのだろうか」

哀しい目で舞台上を見つめる喜田。

ブーと上演のベルが鳴る。

照明がたちこめてあたりは真っ白になる。

○メインタイトル

『トゥザライト　エンディング』

〈劇中劇はじめ〉

○同・舞台上・司咲の家

質素な昭和初期の部屋。

ラジオに耳を寄せている司咲（真依子）。

ちゃぶ台では和雄（花岡）が学校の課題をしている。

司咲「和雄さん、今日の新聞見た？」

和雄「あぁ、イギリスがベルリンを空爆したことだろ？」

司咲「ちがうわよ。戦争のことじゃなくて聡さんのこと」

和雄「聡のこと？」

司咲「そう。ちっちゃくだけど載ってたの！ラジオでもするかな」

和雄「ああ……どうかな」
聡の声「お邪魔しますー」
司咲「あ！噂をすれば」
聡（石垣）、入ってくる。
司咲「聡さん、体操競技会優勝おめでとう！」
聡「（はにかんで）どーも。優等生さんは今日もお勉強ですか」
和雄「うるさいよ」
聡、腰かける。
聡「それより聞けよ。昨日の競技会の後、実業団の人から声かけられたんだよ。一緒にやらないかって！」
司咲「すごいじゃない！聡さんも本格的に体操選手ね。お祝いにマフラーでも編んであげましょうか？」
聡「（笑って）気が早いよ。まだ9月だぞ」
司咲「（はにかんで）そうね」

○同・舞台下手袖（夜）
舞台袖から舞台を見つめている喜田。
聡「親父は実家の修理工継げって言うけどよ。そんなのやってらんねぇよな」
和雄「そんなことよりお前課題終わってるのか？実業団の前にちゃんと卒業できなきゃ何もないぞ」
聡「（焦って）おいおい、なんだよそりゃ。そんなもんがあんのかよ。（机上の紙を取り上げて）これがそれかよ！」
和雄「おい！乱暴に扱うなよ」
和雄、紙を取り返そうとして聡とじゃれる。
その様子を微笑ましく見守る司咲。
笑顔の司咲を見つめる喜田。

（喜田の回想はじめ）
○稽古場・内
真剣な表情で稽古を行う真依子たち。
塚田「（声を荒げて）舞台上にはお前らしかいねぇんだよ。観客全員がお前らを見てん

だよ。小道具もない音楽もない。どうやって魅せんだ？」

真依子「……」

花岡「……」

塚田「動けよ！心からもっと動けよ！」

真依子「はい！」

花岡「はい」

塚田、深く息を吐いて、

塚田「ちょっと昼いれよう。おい、喜田まだかよ」

昼休憩に入る劇団員たち。

喜田が大量の弁当を持って稽古場に入ってくる。

喜田「すいません！遅くなりました」

弁当を机上に置き取り分ける喜田。

塚田、弁当を取りに来る。

塚田「（ボソッと）今日２人多いよな」

ドキッとするように固まる喜田。

喜田「……すいません。忘れてま」

すかさず喜田に蹴りを入れる塚田。

塚田「お前がそんなだから劇団の志気も上がんねぇんだろうが！チームでやってんだよ！舐めんじゃねぇ！」

喜田「すいません……」

見て見ぬふりをする劇団員たち。

○同・外

一人階段に腰かけて休憩をしている喜田。

真依子が通りすがる。

真依子「あっ喜田くん」

喜田「お疲れ様です」

真依子「お疲れーでいいよ。同い年じゃん」

喜田「（ぎこちなく）お疲れー」

真依子「（苦笑い）まあ徐々にね」

真依子、喜田の隣に腰かける。

真依子「喜田くんも大変だね」

喜田「いやいや。大変なのは真依子さんでしょ。主演なんですから」

真依子「私も大変だけど、喜田くんもがんばってると思うよ。監督にめちゃくちゃされて」

喜田「まあ（はにかむ）でもあのオッサン結構すごいんですよね」

真依子「（笑って）オッサンて。私、喜田くんのそういうとこ良いと思うな」

喜田「そういうとこ？」

真依子「大変でも腐れないとこ？監督も絶対喜田くんのこと認めてるよ」

喜田、照れくさそうにする。

真依子、自分が飲んでいたコーヒーを差し出す。

真依子「飲む？」

喜田「いいんですか？」

真依子、喜田は一口飲む。

喜田「甘っ！」

真依子「（笑って）甘かった？」

喜田「甘いでしょコレ」

真依子「私好きなんだよね。甘いコーヒー」

喜田「甘いコーヒーってなんですか。コーヒーは苦いですから」

真依子「（はにかみ）わかるよ。その完璧主義な考え」

喜田「これは完璧主義なんですか？」

真依子「そうでしょ。そりゃコーヒーは苦いしカレーは辛いよ。でもそこが人間強欲なところでさ、時には無理やり甘くして自分好みの味にしようとするんだよね」

喜田「確かに僕も甘いカレーたまに食べますけど」

真依子「コーヒーからしたら砂糖山ほど入れやがってふざけんじゃねぇ！って感じかな。でももし苦いだけのコーヒーだったら絶対こんなに人気になってないよね」

喜田「まあ……」

真依子「もし私が急にアドリブ入れたら監督怒るかな？」

喜田「え？」

真依子「舞台だって時には味変必要でしょ？怒られた時は喜田くん味方してくれる？」
喜田「いや……どうですかね」
真依子、立ち上がって、
真依子「ごめんねなんか変なこと言って。とにかく喜田くんが落ち込んでなくてよかった」
真依子、稽古場に戻ろうとする。
喜田「真依子さん」
真依子「（振り返って）ん？」
喜田「僕、甘いコーヒーチャレンジしてみます」
真依子、微笑んで稽古場へ戻っていく。

○同・内
真剣に稽古を見ている塚田と榎島。
稽古をしている真依子と花岡、横に石垣が座っている。
司咲「出てってよ！」
和雄「いいから聞けよ！昔とは違うんだ！何もかも変わったんだよ」
稽古場の隅で熱心にメモをとる喜田。

○同・外（夜）
バスを待っている喜田。
石垣の声「おうっ喜田」
石垣がやって来る。
喜田「お疲れさまです」
石垣「お前これから用あんの？」
喜田「いや、特にないですけど」
石垣「飯でも行かね？おごってやるから」
喜田「いいんですか？」

○定食屋（夜）
定食を食べる喜田と石垣。
石垣「喜田って塚田さんについてどれくらいになるんだっけ？」
喜田「いま∞カ月くらいですね」
石垣「どう？慣れた？」

喜田「いや、まだまだですね。怒られてばっかりで」

石垣「まあこの業界時間かかるもんなー。お前演出家志望だろ？本とかも書いてんの？」

喜田「いや、構想だけでまだ書いてはないんですよ」

石垣「え、構想あんの？どんな話だよ」

喜田「え？まあ恋愛ものとかサスペンスとか」

石垣「ざっくりだな。どんな恋愛だよ」

喜田「え、話すんですか？」

石垣「話さずに舞台になんのかよ」

喜田「まあ…細かくはまだ考えてないんですけど、理想を見る男と現実を見る女のすれ違いみたいな感じですよ」

石垣「ふーん。お前彼女いんのかよ」

喜田「はい？いませんけど」

石垣「は？お前恋愛もしてねぇくせに恋愛もの書こうとしてんのか？」

喜田「恋愛してない…というか、恋愛イコール彼女とはならないでしょ」

石垣「おっそその様子じゃ好きな人はいるみたいね。誰だよ」

喜田「言いませんよ」

石垣「言えよ。デートしてんのか？」

喜田「してませんよ」

石垣「なんだよそれ。誘えよ！理想ばっか語ったって恋愛はやって来ねぇんだぜ。お前なんかあれだよ。まるで和雄だな」

喜田「和雄…（苦笑い）」

石垣、舞台のストーリーをイメージするように話し始める。

石垣「どうせ綺麗な夢を追い求めるばかり、丁寧にラブレターとか書いちゃったりするんだよ」

〈劇中劇と喜田の回想のカットバック〉

○〈劇中劇〉舞台上・和雄の部屋

机に向かってラブレターを書く和雄。ラジオからは歌謡曲が流れている。

○〈回想〉喜田の部屋（夜）
机に向かってラブレターを書く喜田。
隣には『真依子さんへ』と書かれた封筒。
石垣の声「そうして渡すタイミングを図ってるうちに敵役にとられちまうんだよ。俺だよ」

○〈劇中劇〉舞台上・公園
司咲の手をとる聡。
聡「やっと気づいたんだ。俺と結婚してほしい」
司咲「（照れながら）はい」
手編みのマフラーを巻く二人。
司咲と聡が手を繋いで歩いて行くのを木陰から目撃する和雄。
石垣の声「結局手紙は渡せないまま、気持ちも伝わらないまま」

○〈回想〉定食屋（夜）
熱心に話す石垣。
石垣「でもそんな時事態は急変するんだよ」

○〈劇中劇〉舞台上・公園
重苦しい雰囲気の和雄と司咲。
聡は一人軍服を着ている。
聡「どうだこの姿。晴れ晴れしいだろ？」
司咲「……」
聡「そんな寂しい顔しないでくれ。俺はお国のために徴兵されたんだ」
司咲「ごめんなさい」
聡「それにお前には和雄がついてるから大丈夫だよ」
和雄「聡……」
聡「司咲を頼んだぞ」
歩いて行く聡。
落ち込む司咲の肩をそっと抱く和雄。

○〈回想〉定食屋（夜）
怪訝な表情をする喜田。

喜田「何の話ですか」
石垣「あ？つまりな、和雄の場合敵役が戦争に巻き込まれて姿を消す。だがな喜田、今21世紀の日本に徴兵制度はない」
喜田「何の話ですか？」
石垣「要するにお前の敵役は姿を消さないまま、お前は恋人を失うってことだよ！」
喜田「別に僕恋敵なんていませんから」
喜田はにやけている石垣。苦笑いで定食を食べる。

〇〈回想〉喜田のアパート（夜）
玄関から入ってくる喜田。おもむろに本棚の奥から手紙を取り出す。
手紙には『真依子さんへ』の文字。手紙を棚に戻し、深いため息をつきながらベッドに転がり込む。
塚田の声「喜田」
〈カットバック終わり〉

〇演劇ホール・舞台下手袖（夜）
ぼーっと舞台を見ている喜田。
塚田の声「おい喜田」
我に返るように塚田の方を振り向く喜田。
喜田「はい」
塚田「（指さして）あそこの手元ライト直して」
喜田「え？」
塚田「通路の。足元見えねぇと危ないだろ」
喜田「あ、はい」

〇同・舞台裏（夜）
手元ライトが通路を照らす様に調整する喜田。
突然顔の前でライトが割れる。
喜田「痛っ！」
喜田、顔を触り血が出ていることを確認する。

傷がつき、すすも付いて黒くなっている喜田の顔。

喜田「（ボヤくように）クソッ」

喜田、通りがかったスタッフを見つけ、

喜田「あ、すいません。ここのライト割れちゃったんですけど」

男性スタッフ1「すいません。すぐ替えときます」

○同・観客席（夜）

静かに劇を見ている観客たち。

前列に座る榎島の姿。

○（劇中劇）同・舞台上・司咲の家

電話を手に真剣に話している司咲。

司咲「……そんな……嘘なんですよね？……

聡さん……聡さんが」

力なく受話器を手放して、その場に座り込む司咲。

和雄が駆け足で訪ねてくる。

和雄「司咲、いるのか。（司咲を見つけて）

……聡の事、聞いたのか……」

司咲「（涙ながらに）聡さんは夢があったのよ。体操選手になるって。修理工は継いでられないって。なのになんで……なんでよ！」

司咲、家から飛び出そうとする。

和雄、司咲の肩を掴んで、

和雄「落ち着けよ。これが戦争なんだ」

司咲「離して！」

司咲、和雄の手を振り払って走って出ていく。

○同・舞台下手袖（夜）

舞台上の和雄を見ている喜田。

和雄は哀しそうに上手袖へはける。

喜田M「確かに俺は和雄なのかもしれない。

和雄は政府の仕事について徴兵されなかったからずっと司咲の側に居られたのに、未だに想いを伝えられずにいる。それに想い

を伝えたら戦死した聡への裏切りになってしまうかもしれない。きっと和雄はやるせない運命の中で苦しんでるんだ！……最終的に和雄と司咲が結ばれると知っているのに、俺は何を考えてるんだ」

○同・舞台上・司咲の家

静寂に包まれている舞台。

一人家事をしている司咲。

喜田M「しかし、ここからがこの舞台の面白いところ。もし、死んだはずの恋人が生きて帰って来たら……」

○同・舞台下手袖

喜田の奥にスタンバイをしている石垣。首には司咲のマフラーをしていて顔には傷のメイク。

体調が優れなさそうな石垣。

キラキラした目で舞台上を見る喜田。

喜田M「さて、運命のいたずらに翻弄される和雄は一体どうす」

ドタッ！と何かが倒れる音。

ん？と喜田が振り返ると石垣が倒れている。

喜田「石垣さん！？」

喜田、必死に石垣を揺さぶりながら、

喜田「石垣さん！石垣さん！」

塚田などスタッフが集まってくる。

塚田「どうした！？」

女性スタッフ2「石垣さんが倒れました」

塚田「代役は！？」

女性スタッフ2「今からではさすがに……」

塚田「おいおい。何があったんだよ」

喜田「わかりません。気づいたら倒れてて」

焦って辺りを見る塚田。

戸惑っている喜田。

喜田、何か気づいたように立ち上がり、

喜田「あ！そういえば石垣さん、楽屋であまり体調」

塚田「うらぁ！」

塚田、喜田を舞台上へ蹴り飛ばす。

喜田「ぬぅ！」

○同・舞台上・司咲の家

舞台上へ飛び出してくる喜田。

目を見開く客席の榎島。

何が起こったか分からない様子の喜田、ゆっくりと客席を見渡す。

真剣に舞台を見つめている観客たち。

その中に唖然としている表情の榎島。

舞台下手袖を見る喜田。

下手袖から塚田が『こっちへ来い』とジェスチャーしている。

喜田、舞台を這うようにして下手袖へ消えていく。

○同・舞台下手袖（夜）

混乱した様子で戻ってくる喜田。

喜田「え？」

塚田、喜田にマフラーを掴ませる。

塚田「お前は聡だ」

再び喜田を舞台へ蹴り出す。

喜田「ぬぅ！」

○同・舞台上・司咲の家

再び投げ出されるように舞台上に現れる喜田。

バッと下手袖を見返す喜田。

『扉をノックしろ！』とジェスチャーを送る塚田。

戸惑いながらも司咲の家の扉に向かって這い上がる喜田。

唖然の表情で喜田を目で追っている客席の榎島。

恐る恐る扉をノックする喜田。

司咲「はい」

家事を中断して扉を開ける司咲。

喜田の姿を見て固まる。

言葉が出ない様子の二人。

司咲「え……なんでここに……？」

喜田、どうしていいかわからず下手袖を振り返る。
下手袖で女性スタッフ2が『帰って来たんだ』とカンペを掲げている。
『読め！』とサインを送る塚田。
喜田、ぎこちない動きで司咲を見て、
喜田「帰って来たんだ」
大きな劇場に喜田の肉声が微かに聞こえる。
再び下手袖を振り向く喜田。
下手袖で頭をかかえる塚田。
司咲、何とかしようと焦った様子で、
司咲「そんな……あなたはここにいないはず」
司咲、喜田の持つマフラーに気付いて手に取る。
司咲「（疑心暗鬼に）……聡さん？」
戸惑いながらも頷く喜田。
混乱する司咲、下手袖を見る。
『抱きつけ！』とカンペが出されている。
塚田はインカムで何やら話している。
司咲、不安そうながらも意を決する様に喜田を見つめる。
司咲「本当なのね！本当に帰って来たのね！聡さん！」
勢いよく喜田に抱きつく司咲。
音楽が流れ幕が閉まる。
観客の拍手。
すぐ客席を立って舞台裏へ向かう榎島。
アナウンス「ただいまより15分間の休憩となります。ロビーにはパンフレット……」
○同・舞台下手袖（夜）
溜息をついて腰をおろす塚田。
塚田「ばれてねーな」
喜田と真依子が下手袖に駆け込んでくる。
真依子「ちょっと！どういうことですか！？」
榎島も息を切らしてやって来る。
榎島「今のなんですか！」

塚田「しょうがねぇだろ。石垣倒れちゃったんだから」
真依子「え！？本当ですか？」
榎島「いや、だとしても……」

○同・楽屋口通路（夜）
コツコツと音を立てながら歩くハイヒール姿。
女性スタッフ3が気づいたように、
女性スタッフ3「あ、すいません。ここは関係者以外立ち入り禁止で」
奈々の声「いいの。関係者だから」
歩き去る奈々の後ろ姿。
唖然としている女性スタッフ3。
『花岡翔平様』と書かれた楽屋の前でハイヒールの音が止まる。

○同・舞台下手袖（夜）
焦るように喋る榎島。
榎島「どうするんですか！」
塚田「いいから。脚本持って来いよ」
喜田「はいっ」
塚田「お前じゃねぇよ！お前ここにいろよ」
喜田「あ……はい」
女性スタッフ2「私取ってきます」
真依子「石垣さんは？」
塚田「（指さして）あそこで寝かしてる」
舞台袖の奥で横になっている石垣。
塚田「このまま突っ切るしかねぇか」
喜田・真依子「え！？」
喜田「いやでもおかしいでしょ。途中から人変わってたら」
塚田「榎島、どうだった？」
榎島「……まあ観客はそんなに気づいてない感じでしたけど」
塚田「な？」
喜田「そんな～」

○同・楽屋口通路（夜）

トイレから出て自分の楽屋へ向かう花岡。
楽屋の扉を開けてびっくりした表情をする。

○同・花岡の楽屋（夜）
飽きれた表情になる花岡。
花岡「なんで居んだよ」
ソファに堂々と座る篠田奈々（27）。
奈々「来ちゃった」
花岡、別の衣装に着替えながら、
花岡「なんだよ。もう用ないだろ」
奈々「そんなこと言わないでよ。せっかく千秋楽？応援しに来てあげたんだから」
花岡「帰れよ。気が散るから」
奈々「（笑顔で）嫌だ。そうだ！この後二人でお祝いしようよ！お疲れ様パーティ！」
花岡「しないよ。こっちは忙しいんだ」
奈々「ねーいいでしょ。いつものレストランでさ。記念日ももうすぐじゃん」
花岡「（痺れをきらして）もういい加減にしろよ！お前と俺は終わったんだから。付きまとうなって」
奈々、立ち上がって花岡の手を取り、
奈々「そんなの嘘よ。この前ちょっと喧嘩しただけでしょ。ほら、もう全然怒ってないんだから」
花岡の携帯が鳴る。
花岡「ちょっ電話だ。いいから。お前もう帰れよ！」
花岡、奈々の手を払って電話に出る。
花岡「あっお疲れ様です。今ちょうど中休憩で……ありがとうございます」
花岡、楽屋を出ていく。
奈々「ちょっと待ってよ！」
奈々、不貞腐れながらソファに座り何気なく辺りを見る。
掛かっている花岡の衣装のポケットから手紙の端が見えている。

奈々、気になるように手紙を取り出し中身を読み始める。読みながら顔色が険しくなっていき、

奈々「（驚愕）結婚してください！？」

○同・舞台下手袖（夜）

脚本を真剣に読み込んでいる塚田・榎島・喜田・真依子。

真依子「さすがに無理があるんじゃないですか？」

塚田「もうやるしかねぇんだよ。何となく流れは頭に入ってるよな？」

喜田「（不安そうに）はぁ……」

○同・花岡の楽屋（夜）

楽屋に戻ってくる花岡。

花岡「まだ居たのかよ。帰れって」

奈々「（怒ったように）何よこれ」

奈々、手紙を見せつける。

花岡、慌てる様に手紙を奪い取り、

花岡「おい！読んだのかよ！」

奈々「誰よ司咲って！」

花岡、少し吹き出して笑い、

花岡「ばかやろう舞台で使うんだよ！役の名前に決まってんだろ」

奈々「じゃあなんでそんなに書き直してんのよ！しかもそれ翔平の直筆でしょ！」

花岡「（焦るように）そりゃ台本見て写したって間違うことくらい……」

奈々「じゃあ最後の『共に作り上げた劇も今日で最後。だから言います。結婚してください』って何よ。これが舞台のセリフなの！？」

花岡「何だっていいだろ！お前には関係ないんだよ！」

奈々「浮気してたんでしょ！いつからよ！」

花岡「ったく」

花岡、衣装を取って楽屋を出る。

後を追う奈々。

○同・楽屋口通路（夜）

奈々を無視して歩く花岡。

奈々「私と離れて3日で結婚するなんてことがあるわけ！？ずっと浮気してたんでしょ！言ってみなさいよ！」

異様な目で見る周りのスタッフたち。

奈々「その女もどうせ舞台の女なんでしょ？教えなさいよ。面と向かって話してやるから」

花岡、急に止まって奈々の方を向く。

花岡「いいか？ここは関係者以外立ち入り禁止だ。分かったら出て行け」

奈々を無理やりロビーへ押し出す花岡。

奈々「きゃ！」

花岡、舞台の方へ歩いて行く。

奈々はムッとした表情で劇場の外へ歩いて行く。

○同・舞台下手袖（夜）

演技を合わせている喜田と真依子。

喜田は軍服に着替えている。

塚田「違ぇよ！お前が石垣に寄せようとしてどうすんだよ！そんなの出来るわけねぇだろ！」

喜田「あぁ……」

塚田「そうじゃなくてお前自身でいいんだよ。お前はやっとの思いで戦場から脱走して帰ってきたんだ。しかし戦争で精神を病んだお前は昔の愛を取り戻そうとすればするほど愛する司咲を傷つけてしまう。思いつめた挙句最後は無理心中をして一緒になろうとする。イメージできるか？」

喜田「いやぁ……」

塚田「とにかくあと5分、キャラクターをイメージすることだけ考えろ。セリフは袖で出してやるから安心しろ。アドリブでいいから気持ちで喋れ！」

音声スタッフが喜田にマイクをつける。

塚田「ただ声は石垣に寄せろよ？あんまり違うとバレるからな」

真依子「（不安そうに）喜田くん。思い切りやればなんとかなる。がんばろ」
喜田「ちょっとトイレだけ行かして下さい！」
トイレに走る喜田。

○同・劇場外・喫煙所（夜）
イライラした様子でタバコを吸う奈々。
奈々「どこのアバズレよ。許されるとでも思ってんの？」
まだ長さのあるタバコを灰皿に押し付けて、劇場内へ戻っていく。

○同・楽屋口通路（夜）
トイレから出てくる喜田。
奈々の声「ちょっとアンタ！」
驚くように振り返る喜田。
喜田「あ、ここは関係者以外……」
奈々「（遮るように）司咲って女どこよ」
喜田「はい？」
奈々「舞台の女なんでしょ？どこ！？」
喜田「え……司咲ってヒロインの？」
奈々「ヒロイン！？その女の楽屋どこよ！通しなさいよ！」
奈々、楽屋口へ入ろうとする。
喜田「（奈々を止めて）ちょっと待ってください！どうしたんですか」
奈々「その女が私の男と浮気してたのよ！」
喜田「え……」
奈々「だから面と向かって話してやるの」
喜田「男って花岡さん……？」
奈々「なにアンタ知ってんの？（怒って）やっぱり浮気しやがって！さあ！どこ楽屋！？」
また楽屋口に入ろうとする奈々を喜田が止める。
喜田「ちょっ楽屋にはいませんよ！もう開演しますから」
奈々「はぁ！？絶対容赦しないから！」
歩き去っていく奈々。

戸惑いながら舞台裏へ移動する喜田。

○同・観客席（夜）

奈々が劇場内に入ってくる。

前の列まで歩いて、榎島が座っていた席が空いているのに気づき座る。

隣の席の初老が怪訝そうに奈々を見る。

気にせずガムを噛み始める奈々。

奈々「というかどういう話なのこれ？」

隣の初老、誰に話してるんだろう？と困惑しながらも奈々を無視する。

気にせず舞台を見ている奈々。

○同・舞台下手袖（夜）

考え込む様子で戻ってくる喜田。

真依子「喜田くんはやく！最初喜田くんのシーンなんだから！」

悩む表情の喜田。

真依子「大丈夫。なんとかなるから」

真依子、喜田に優しく笑いかける。

複雑な表情で真依子を見る喜田。

○（劇中劇）同・舞台上・戦場

ブーと開演のベルが鳴る。

幕が上がり、銃声と爆発音が響く。

喜田と何人かの兵士が銃を持って床に伏せている。

兵士「全身全霊！！」

喜田たち兵士「うぉー！」

走る喜田たち兵士。

撃たれて倒れる兵士。

喜田は周りの兵士に合わせるように動いている。

聡のナレーションがSEとして舞台に流れる。

聡N「戦場は壮絶だった。いつ死んでもなんの不思議もない世界。俺は何のために生きてきたのか。ただがむしゃらに戦い続けた」

銃声の音が止む。

照明が暗くなり喜田にスポットライト。

下手袖の塚田が写真を取り出すジェスチャー。
写真を取り出す喜田。
聡N「写真の3人は笑ってた。それは今までの夢や愛が詰まった世界が嘘じゃなかったって証明してくれてたんだ」
写真を軍服に直す喜田。
聡N「それは突然だった」
大きな爆発音。
喜田「だっ！」
喜田、リアルに腰を抜かしてその場に倒れる。
聡N「何日倒れていたか分からない。ただ俺はまだ死んでいなかった」
ゆっくりと起き上がる喜田。
聡N「そして気づいたんだ。俺には帰る場所がある。待ってる人がいる」
腰を抑えながら痛々しく歩く喜田。
聡N「俺はひたすら歩き続けた。戦争が終わったことなんて俺には関係がなかった」
喜田、立ち止まって鞄から司咲のマフラーを取り出す。
聡N「そしてやっとたどり着いたんだ」
その場に倒れ込む喜田。
暗転する。

○同・舞台下手袖（夜）
舞台上の喜田を見つめる真依子と床に倒れ込んでいる塚田、脚本を真剣に見つめる榎島。
塚田「いっただろ」
真依子「バレては……ないです」
榎島「まあ一応は……」

○（劇中劇）同・舞台上・司咲の家
ちゃぶ台を囲っている喜田と司咲。
ちゃぶ台には日本酒の一升瓶が置いてあり、喜田は下手側の司咲の方を向いている。
司咲「ちょっと聡さん飲みすぎじゃない？」

喜田「……」

司咲「そうだ。チョコレート食べる？甘いんだよ。お酒には合わないかもしれないけど」

司咲、箱からチョコレートを取り出す。

喜田「どうせ米軍が配ってるやつだろ」

司咲「気にしなくていいから。ね？」

喜田、チョコレートを見て、

「（棒読みで）そうだよ……俺には殺せなかった。上官からは毎日お前はクズだと言われ、挙句の果てに戦線から逃げ出して俺だけ生き残って……俺はどうしようもない非国民だよ」

司咲「そんなことない。聡さんには体操選手になっていう立派な夢もあったでしょ？」

喜田「体操？そんなの忘れたよ。毎日寝床につけばいつ爆撃されるかと眠ることもできず、手足が震えて修理工の手伝いもできない。いっそのことあの時死んでいれば」

司咲、勢いよく喜田の肩を掴む。

司咲「聡さんしっかりして！戦争は終わった！私の知ってる聡さんはもっと明るくて」

喜田、チョコレートを投げ飛ばす。

チョコレートは観客席へ飛んでいく。

司咲「（飛ぶチョコレートを見て）あ」

喜田「いいから酒持ってこい」

○同・舞台下手袖（夜）

真剣に舞台を見つめる塚田と榎島・カンペを出している女性スタッフ２。

塚田「棒読みは棒読みで不気味でいいかもな」

榎島「いやぁそうですかね……」

○同・観客席（夜）

飛んできたチョコレートの箱を握りつぶす奈々。

奈々「（怒るように）あいつが司咲でしょ」

驚いている隣の初老。

○同・舞台下手袖（夜）

脚本を見ている塚田と榎島。

塚田「次、花火のシーンだろ？」
榎島「そうですね」
塚田、袖でスタンバイする浴衣を着た子役の元へ行く。
塚田「ちょっといいかな。次のシーン、大きな花火の音が鳴ったらどさくさに紛れて聡の股間を殴って欲しいんだ」
子役「股間を殴る？」
塚田「そう。でもお客さんにバレたら負けだからね。できるかな？」
子役「はい！思い切りやります」
塚田、子役の頭をなでる。
塚田「よし。君は将来有望だ」
塚田、近くにあった小道具から銃を取って榎島の元へ戻ってくる。
榎島「何を指示したんですか？」
塚田「本人が演じられなきゃ、周りが強制的に演じさせるしかねぇよ」
榎島「（察したように）なるほど」

〇（劇中劇）同・舞台上・公園
浴衣姿の司咲と喜田歩く。
周りには町人役のエキストラが数人。
司咲「花火大会なんて久しぶりだね」
喜田「あぁ……」
司咲「（上を指さして）ほらほら、花火上がってるよ」
喜田、下手袖を見て目を見開く。
下手袖から塚田が銃を喜田に向けて構えている。
パンパンと花火の音。
喜田は肩をすくめながら銃に怯える。
司咲「ねぇ見て見て。綺麗だよ」
喜田「（怯えるように）いや、ちょっと……」
大きな花火のドーン！という音。
その瞬間子役が喜田の股間を殴る。
喜田「んっ！」
思わずその場にしゃがみ込む痛みに顔を歪める喜田。
司咲「聡さん！？どうしたの？」

喜田「（苦悶の表情で）早くここから逃げないと。爆撃される！」
司咲「聡さん……」

○同・舞台下手袖（夜）
得意げに銃をクルクル回している塚田。
榎島「（感心するように）戦争の記憶に悩まされる聡は昔の生活には戻れない……迫真の演技じゃないですか」
塚田「まあな。これが演出ってやつだよ」

○同・舞台上手袖（夜）
上手袖に歩いてくる花岡。
花岡「は！？石垣さんの代役って……ウソだろ！？」
女性スタッフ3「本当です」
花岡「え？それで出来てんの？」
女性スタッフ3「何とかしてます。とりあえず花岡さんはいつも通り進めてください」
花岡「いつも通りって言っても……」
戸惑いながらも舞台へ出ていく花岡。

○（劇中劇）同・舞台上・和雄のオフィス
電話が鳴る。
和雄「はい、細川です。おう、聡か……え！？っでどこの警察に居るんだよ。……わかった。とりあえずすぐに行くから待っ
てろ」
上着を取って急いでオフィスを出ていく和雄。

○同・舞台下手袖（夜）
塚田、熱心な表情で喜田の肩を掴んでいる。
塚田「次が一番大事なとこだ。わかるな？」
喜田「はい」
塚田「ここで一番大事なのはパッション、狂気だ。戦争で精神をやられた聡は愛する人へも乱暴してしまう。その狂気を表現しろ！ここは棒読みじゃ通用しないからな！」

喜田「……はい」
慌てて脚本を読み返す喜田。

〇〈回想〉稽古場
稽古をする出演者たち。
聡が司咲の元へ走りこんでくる。
司咲「聡。どうしたの、そんなに慌てて」
聡「やっと気づいたんだ、幸せになる方法。この街を出よう」
司咲「え？」
聡「この街を出て、どこか遠くで暮らすんだ。二人だけでずっと」
司咲「そんな急に……」
聡「さあ行こう！」
聡、司咲の腕を掴んで引っ張る。
司咲「なんで？どうやって生活するの……」
聡「そんなのどうだっていい！だから早く！」
司咲「ちょっと痛い。離して」
更に強く引っ張る聡。
司咲「やめて。離して！」
司咲、聡の手を必死で振りほどくと、衝撃で後ろへ倒れる。
司咲、ゆっくりと立ち上がりながら、
司咲「……なにが不満なの？」
聡「なにが不満？……なにもかもだよ。戦争が終わったらそれでいいのか？何人も死んだんだ……俺の目の前で……まだ少年のような子が手足を失って叫んでた」
聡、涙目で司咲を睨む。
聡「それなのに何で何事もなかったかのように暮らせるんだよ！戦場で死んだ奴らを無視してどうやって幸せに暮らせって言うんだよ！」
聡、机の上の書類等を荒らし始める。
司咲「聡！」
司咲、聡を抑えようと後ろから抱きかかる。
しかし聡は司咲を振り払い、その勢いで顔を思い切りはたく。
聡、足早に出ていく。

後ろ姿を哀しそうに見ている司咲。

○同・舞台下手袖（夜）

真剣に見ていた台本を閉じて、ゆっくりと大きく深呼吸をする喜田。意を決したように目を開き、勢いよく舞台上に出ていく。

○（劇中劇）同・舞台上・司咲の家

司咲、入ってきた聡に気づく。

司咲「聡。どうしたの、そんなに慌てて」

喜田「やっと気づいたんだ、幸せになる方法。この街を出よう」

司咲「え？」

喜田「この街を出て、どこか遠い場所で暮らすんだ。二人だけでずっと」

司咲「そんな急に……」

喜田「さぁ行こう！」

司咲の腕を掴んで引っ張る喜田。

司咲「なんで？ここの暮らしは？」

喜田「そんなのいいから早く！」

司咲「ちょっと痛い、離してよ」

それでも引っ張り続ける喜田。

司咲「やめて！離して！」

司咲は喜田の手を振りほどき、その衝撃で二人とも後ろへ倒れる。

腰を床に強打し苦悶の表情を浮かべる喜田。

司咲「なにが不満なの？」

喜田、痛がりながらも立ち上がり、

喜田「なにが不満？……なにもかもだよ。戦争が終わったらそれでいいのか？……何人も死んだんだ……おれの目の前で、まだ少年のような子が手足を失って叫んでた」

喜田、セリフを思い出すように考えて、

喜田「それなのに何でみんな平然と暮らせるんだよ！戦場で死んだ奴らを無視してどうやって幸せに暮らせって言うんだよ！」

長台詞が言えて安堵する様子の喜田、思い出したように机上の書類等を荒らし始める。

司咲「聡！」

司咲、喜田を抑えようと後ろから抱きかかる。

喜田、司咲を振り払って思い切り叩こうと振りかぶる。

その瞬間、ドンッ！という音と共に喜田が床に散らばった書類に足を滑らせて転んでいる。

再び腰を強打し痛がっている喜田。

戸惑う様子の司咲、ゆっくり喜田の元へ寄っていき、

司咲「大丈夫……？」

喜田、慌てるように顔を上げると司咲の顔に頭突きをしてしまう。

司咲「うっ！」

喜田「あ……ごめん……」

司咲を心配するように見る喜田。

司咲は顔を手で押さえながら『大丈夫』と手でサインをおくる。

ぎこちなく下手袖へはけていく喜田。

下手袖には無表情で立ち尽くしている塚田と榎島。

その横を気まずい様に舞台裏へ歩いていく喜田。

○同・舞台裏（夜）

放心状態で一点を見つめている喜田。

後ろから花岡がやって来て喜田の肩を叩く。

花岡「おい、聞いたぞ喜田。お前石垣さんの替わりやってんだってな！」

喜田「あぁ……」

花岡「ちゃんと台本通りやれよ。今日は俺の大事な日なんだからな。頼むぞ」

花岡、喜田に持っていた手紙を見せつけ、舞台に向かう。

苦笑いをする喜田。

○（劇中劇）同・舞台上・司咲の家

玄関の戸を叩く和雄。

和雄「司咲。いるんだろ？入るぞ」

和雄、戸を開けて入る。

散らかった部屋で司咲がうずくまっている。

和雄「どうしたんだこれ。ケガしてるじゃないか」

司咲「大丈夫……」

和雄「聡か？」

司咲「え？」

和雄「昨日俺のところに聡から連絡があって。警察に保護されてるって。町で絡んできたチンピラに暴行されて病院送りにしたらしい。俺が警察と話をして解放してもらったんだけど、あいつどこか様子がおかしかった。これもあいつがやったんだろ？」

司咲「聡さんはあんな人じゃ……」

和雄「しょうがないのかもしれない。戦争から帰ってきて精神を病む人は一定数いるらしい。戦争があいつを変えたんだよ」

司咲「そんな、せっかく帰ってきたのに……」

落ち込む司咲を優しく見つめる和雄。

○同・舞台下手袖（夜）

舞台を見つめている塚田と榎島。

横で立ち尽くしている喜田。

塚田「おかしいよな」

榎島「おかしいですね」

塚田「あの聡がチンピラを病院送りにできるわけないもんな」

榎島「うーん」

塚田「今の聡ってどんなキャラ？」

榎島「恋人を思うあまり戦争から抜け出して、幸せな生活を手に入れようとするも、すべての行動が空回りして人に迷惑をかけているドジな奴です」

塚田「そうだよな。普通だったらそんな奴放っておいてさっさと和雄と一緒になった方がいいよな」

喜田、舞台上で演技をする司咲と和雄の様子を見る。

榎島「確かに。観客ももう和雄の方を応援してるかもしれないですね」

喜田、客席の方を見ると奈々が隣の初老に愚痴を言っているのが見える。

塚田「もう聡は死んだことにして聡のシーン削るか？」

喜田「え……」

榎島「そんなことできます？」

塚田「ヘンテコな舞台だなって思われるよりマシだろ。聡は精神を病んで社会に溶け込めず自殺する。長年司咲を思っていた和雄はついに想いを伝え二人は結ばれハッピーエンドだよ」

喜田、舞台上を見ると和雄が司咲の肩を持って諭すように話している。

塚田「とにかくこの舞台の主演は花岡と真依子なんだから。この二人がくっつけば観客も満足するだろ」

榎島「まあ……」

喜田、ポケットの中の手紙を握りしめて、舞台上の司咲を見つめる。

塚田「よしっじゃあ聡は死んだことに……」

喜田、真剣な表情で舞台上へ出ていく。

榎島「ちょ、ちょっと！」

〇〈劇中劇〉同・舞台上・司咲の家

司咲の肩を掴んで話す和雄。

和雄「病院へ入れて隔離した方が聡のためかも……」

司咲「聞きたくない！もう出てってよ！」

司咲、和雄を払いのける。

和雄「落ち着けよ！もう昔とは違うんだよ！何もかも変わっちゃったんだ。お前……」

和雄の視線の先に喜田の姿。

司咲、和雄の様子を気にして振り向き、喜田の姿にびっくりする。

司咲「どう、したの……？」

喜田「司咲は今でも聡のことが本当に好きですか？」

困惑する司咲。

喜田「町を出ようなんてのはどうだっていいんです。ただ聡は司咲のことが本当に好きだから。司咲を失いたくないだけなんです！」

○同・舞台下手袖（夜）

冷静に舞台を見つめている塚田とその横で混乱している様子の榎島。

榎島「ちょっと！どうなってるんですか！？台本にあんなシーン……自分のこと聡って言ってるし、あれ誰なんですか！？」

塚田「さあな」

○（劇中劇）同・舞台上・司咲の家

喜田を見て困惑している様子の司咲と和雄。

和雄「聡、お前はちょっと気が動転してるんだろ。だから今日は一旦帰ろう」

喜田「和雄だってそうでしょ！？」

和雄「は？」

喜田「和雄だって司咲のことを想ってるんでしょ！？でもこれまでもこれからも司咲だけを想い続ける事はできるんですか！」

和雄「なんの話してんだよ」

喜田「俺はこれからもずっと司咲だけを想い続けるって約束できる！」

和雄「それは俺だって一緒だよ。ずっと司咲を傍で支えてきたんだ」

喜田「俺は司咲を裏切ったことなんてない！」

和雄「（困惑して）……お前何言ってんだよ」

喜田「あ……ごめんなさい」

喜田、我に返ったようにしてそそくさと舞台下手袖へはけていく。

状況が掴めていない様子の司咲。

司咲「裏切った……？」
和雄「何のことかさっぱり分からないよ。とにかくあいつは気が動転してるんだ」
芝居で何とかその場をつなごうとする二人。

○同・観客席（夜）
舞台に見入っている様子の奈々。
奈々「（指さして）そうよ！あの男が裏切ったのよ」
びっくりする隣の初老。

○同・舞台下手袖（夜）
下手袖に戻ってくる喜田。
榎島「ちょっと！どういうことだよ！」
喜田「すいません。でも、自分の聡役が死ぬのは嫌で……何とかシナリオを変えさせてください！」
塚田「もう十分変わっとるよ」
喜田「いや、これには訳が……」
塚田「お前が真依子を好きなだけじゃないんだろ？」
喜田「え……」
塚田「何が起こってんのか詳細に教えろ」
喜田「あ、はい。実は花岡さんはこの舞台の最後で真依子さんにプロポーズしようとしてるんです」
榎島「は！？」
喜田「でも花岡さんは他に恋人がいて……」
塚田「それでお前がそのプロポーズを阻止したいってことか」
榎島「でも舞台でプロポーズってどうやって……」
喜田「最後の手紙を読むシーンをオリジナルの手紙に替えるみたいです」
榎島「人の本を勝手に変えやがって……」
塚田「よし。それでいこう」
喜田「え」

塚田「花岡に真依子を渡したくねぇんだろ？じゃあ奪って来いよ。ほら、お前の出番だぞ」

喜田、少し考えて意を決するように、

喜田「はい！」

喜田、張りきって舞台上へ出ていく。

榎島「ちょっと。大丈夫なんですか？」

花岡「まあ聡って意地でも司咲を手放したくないって役じゃねぇか。もしかしたらこれが俺の求めてた誰にも予想できない舞台かもな」

榎島「僕たちにも予想できないんですか……」

塚田「ここからが俺たちの本当の仕事だな。脚本見直すぞ！」

塚田、近くにいた男性スタッフを呼び止める。

塚田「あと、これ以降花岡をこっちへ来させるな。これから起こることはドキュメンタリーだ」

○同・舞台上手袖（夜）

花岡、舞台上手袖に戻ってきて水を一口飲む。

花岡「ちょっと、あれどういうことだよ！」

花岡、舞台裏へ回ろうとする。

男性スタッフが花岡を止める。

男性スタッフ「花岡さんすいません。ここで待機してもらえますか？」

花岡「ん？ちょっと監督に話が」

男性スタッフ「監督がここで待機させるように言ったんです」

花岡「は？なんでだよ」

花岡、強引に通り抜けようとするも男性スタッフがそれを阻止する。

○同・舞台上手袖（夜）

真剣に本を読み込んでいる塚田と榎島。

塚田「一応本当の舞台の流れを確認しよう。まず、これから聡の司咲への想いは間違った方向へエスカレートしていき……」

場面は稽古場の回想へオーバーラップする。

〇〈回想〉稽古場

散らかった司咲の家。

聡が司咲のもとへ歩み寄る。

塚田の声「このままでは司咲を失ってしまうと思った聡はついに無理心中を決意する」

聡が司咲に銃を突きつける。

司咲、怯えるように後ずさりし部屋の隅に追い詰められる。

塚田の声「聡が銃を突きつけた時二人はもみ合いになり、反動で司咲は聡を殺してしまう」

銃を掴んで二人もみ合いになり、司咲が銃を奪った瞬間、威嚇のつもりだったが恐怖のあまり発砲してしまう。

聡、自分の血を確認しながら最期は司咲を見つめて倒れる。

塚田の声「恋人を殺してしまったことを信じられない司咲のもとに和雄が現れ、司咲を優しく抱きしめる」

部屋の状態を見て唖然とする和雄。

うなだれている司咲を優しく抱きしめる。

塚田の声「まもなく刑事がやって来て、和雄は聡の自殺だったと説明する」

和雄は倒れている聡に拳銃を掴ませ、自分のラブレターを司咲に見えないように聡の懐に入れる。

刑事がやって来て和雄に事情聴衆をする。

刑事は聡の懐からラブレターを発見し読む。

塚田の声「そして和雄のラブレターは聡の遺書だと認識され、自殺を証明するものとなる」

ラブレターの内容を聞いて感動する様子の司咲。

塚田の声「ただ司咲だけはこの手紙を書いたのが和雄だということが文面から分かる。聡を悪者にしたくないという和雄の思いと自分のことをずっと想ってくれていたという和雄の愛に司咲は感動しながら、二人は抱擁し支え合っていく」

悲しみながらも抱き合う司咲と和雄。

○同・舞台下手袖（夜）

考えている様子の塚田と榎島。

塚田「なんかおかしいとこあったか？」

榎島「まず今の聡に無理心中をするような狂気はありませんね。そして和雄の裏切りを思わせるようなことを言った。和雄は戸惑いながらも話をそらしましたが、あまり良い印象はもちませんね」

塚田「ということは今の聡が心中することはないか」

榎島「そうですね」

塚田「じゃあ最終的にはどうなるんだ」

榎島「この作品の本当のテーマは『戦争によって歯車を狂わされた3人の友情・愛』ですけど、これからのドキュメンタリーは『戦争にも負けなかった愛』ですかね。つまり聡と司咲が最終的にくっつく？」

塚田「じゃあ聡が主役、和雄が恋敵か」

榎島「そうなりますね」

塚田「純愛には分かりやすい悪役が必要だよな」

榎島「はい」

○同・舞台上手袖（夜）

混乱する様子の花岡。

花岡「何が起きてんだよ！なんであいつがあんなことを！？さっぱり分かんねぇ」

歩き回る花岡。

花岡「監督どこだよ！」

舞台裏を通ろうとする花岡。

女性スタッフ3「花岡さん！あの……」

花岡「なに！どうした？」

花岡、振り返って上手袖に戻ってくる。

女性スタッフ3「あれ……」

女性スタッフ3、舞台上を指さす。

舞台上では喜田と司咲がいて、そこへ軍服姿に付け髭をした塚田が歩いてくる。

花岡、舞台を凝視して驚く。

花岡「監督！？」

○〈劇中劇〉同・舞台上・司咲の家

必死で司咲に訴える様子の喜田。

喜田「僕は戦争で精神を病んでなんかいない！とにかく司咲を失いたくないだけなんだ」

戸惑うように聞いている司咲。

玄関の戸を叩く音。

突然の音にびっくりする司咲と喜田。

恐る恐る戸を開けに行く司咲。

司咲「はい」

戸を開けると軍服姿の塚田がいる。

塚田「私、軍事局の森本と申します。三宅聡さんの婚約者の方で間違いないですか？」

司咲「〈困惑するように〉……はい」

塚田「誠に申し上げにくいのですが、三宅聡さんの戦死報告書が偽装されていたことが分かりました」

司咲「え……どういうことですか？」

塚田「政府機関の何者かが三宅聡さんを死んだ者としようとして偽の戦死報告書を作成したということです。我々は今その犯人の捜査をしてまして、この筆跡に見覚えはないでしょうか？」

塚田、懐から一枚の紙を取り出して司咲に見せる。

その紙には大きく『和雄の字』と書かれている。

司咲「え、和雄さん？」

喜田、気になって紙を覗き込む。

塚田「和雄？苗字は分かりますか？」

司咲「あ、えっと細川和雄です」

塚田「細川和雄ですね、ありがとうございます。それではこの名前をもとに調査を進めてまいります」

喜田「和雄がそんなことを……」

塚田「そうですね。戦死報告を偽装するということは三宅聡さんを待つすべての人の希望や未来を奪ったということ。細川和雄はとんでもないやつです。それでは私は失礼いたします」

塚田、喜田にウインクをして舞台下手袖にはけていく。

困惑している様子の喜田と司咲。

○同・舞台上手袖（夜）

舞台上を見ながら目を見開いている花岡。

花岡「俺が戦死報告を偽装した！？畜生！」

男性スタッフの制止を振り切って舞台裏へ回っていく花岡。

○（劇中劇）同・舞台上・司咲の家

考えこんでいる様子の喜田と司咲。

司咲「知ってたの？」

喜田「いや……」

司咲「もう、こんなことになるなんて。私知らないよ、どうすればいいの？」

喜田「……」

何を言っていいか分からなくなる二人。

○同・舞台上手袖（夜）

花岡が塚田のもとへ走りこんでくる。

付け髭を外している塚田。

花岡「ちょっと監督！今のどういうことですか！」

塚田「どういうことって……いいんじゃない？一回くらい悪役になったって」

花岡「冗談じゃないですよ！」

榎島「和雄は学生時代から司咲を想っていた。だが、なかなか想いを伝えられない挙句友達に恋人を取られてしまった和雄は、つい

に聡の存在を消すことで恋人を手に入れようとする」

塚田「いいな」

花岡「よくないですよ！」

塚田「悪いがそれでやってくれ。石垣が倒れてピンチなんだ」

花岡「いやです！今日は大事な日なんです！」

花岡、舞台上を睨むようにして、

花岡「ふざけんじゃねぇぞ！」

花岡、そのまま舞台上へ出ていく。

○〈劇中劇〉同・舞台上・司咲の部屋

会話もなく座っている喜田と司咲。

戸をたたく音にびっくりする二人。

司咲、戸を開けに行く。

その瞬間、和雄が戸をこじ開けるように入ってくる。

和雄「〈焦るように〉司咲、何かの手違いなんだ。な？わかるだろ？」

司咲「なんのこと？」

和雄「いや……ただ俺は聡の戦死の誤報が来たから報告書を出しただけなんだよ」

司咲「え、なんで和雄さんが聡の戦死報告が偽装されたことを知ってるの？」

和雄「えっと……あの、軍事局が俺の調査をしてるって聞いて。俺は罠にはめられてるんだ。何も悪いことはしていない」

喜田「ウソだ。本当にやましいことは何もないって言えるんですか？」

和雄「うるせぇよお前は！お前は関係ねぇだろ！」

喜田「関係大ありですよ！だって僕の戦死報告でしょ！？和雄は僕を死んだことにして司咲を奪おうとしたんじゃないんですか！？」

和雄「お前調子のんなよ」

喜田「でも本当でしょ？どうなんですか？」

面倒くさそうにする和雄。

喜田「僕は決めたんです。もう司咲を失わないようにしようって」

和雄「（遮るように）失うも奪うもねぇよ！俺と司咲は今付き合ってんだよ！」
固まる喜田と司咲。
和雄「それも３か月前からな！」

○同・舞台下手袖（夜）
驚く表情の塚田と榎島。
塚田「おっと……」

○同・客席（夜）
驚いて固まっている奈々と隣の初老。

○（劇中劇）同・舞台上・司咲の家
険しい剣幕でまくしたてる和雄。
和雄「お前が司咲のことを一心に想ってピュアだからって、そんなことはどうだっていいんだよ！こっちはお互いに好き同士で付き合ってんだから、人の彼女勝手に奪おうとしてんじゃねぇよ！」
何も言い返せない様子の喜田。
混乱している司咲。
和雄「こんな茶番付き合ってられるか！」
和雄、強引に司咲の手を引く。
和雄「行くぞ」
司咲「ちょっと！」
和雄が司咲を引っ張って上手袖へはけていく。

○同・舞台上手袖（夜）
必死に花岡の手を振り払う真依子。
真依子「ちょっと何がどうなってるの！？」
花岡「脇役は脇役らしくしとけばいいんだよ」
真依子「どういうことよ！あなたたちは現実のことを言ってるの？」
花岡、真依子の肩をつかんで、
花岡「これで現実でも舞台上でもお前は俺の婚約者だ！」
真依子「もう！説明してよ！」

○同・舞台下手袖（夜）

腕を組んで考え込んでいる塚田。

榎島「戦死報告作戦弱かったですかね。和雄に『こいつは浮気してるんだ！』とか言っちゃえばいいのに」

塚田「どうやら自分の手は汚せないってことだな、今回の聡は」

石垣の声「汚れ役なら僕ができますよ」

声の方を振り向く塚田と榎島。

○〈劇中劇〉同・舞台上・司咲の家

座ったまま俯いている喜田。

照明が薄暗い青に変わる。

石垣の声「それでいいのか聡」

ハッと顔をあげる喜田。

石垣の声「何で俺は正直なことを言えないんだ。言っちゃえばいいじゃないか。浮気してるようなやつに司咲はやれない！って」

○同・舞台上手袖（夜）

真依子、舞台上の声に反応し舞台上を注目する。

○〈劇中劇〉同・舞台上・司咲の家

驚くように舞台下手袖を見る喜田。

下手袖では石垣がマイクに向かって聡の心の声をしている。

石垣の声「そうだ、伝えよう。浮気してる和雄とは別れて、俺と一緒に幸せな生活を作ろうって」

○同・舞台上手袖（夜）

真依子、怒った様子で、

真依子「ちょっとあれどういうこと？あれも現実のことを言ってるの！？」

花岡「（戸惑うように）そんなわけないだろ。ただの演出だよ」

真依子「もう、何がどうなってるのか全然わかんない！誰を信用すればいいの！？」

花岡「俺だよ。俺を信用すればいい。彼氏だろ？」

真依子、花岡の顔を見つめる。
軽く作り笑顔をする花岡。
真依子、勢いよく舞台上へ出ていく。

○〈劇中劇〉同・舞台上・司咲の家
喜田のもとへ走ってくる司咲。
司咲「ねぇ聡、本当のことを言って。和雄の裏切りってどういうこと？」
喜田「それは……」
司咲「私と和雄が3か月前から付き合ってるのは本当のこと。あの人から告白されて。でも何か秘密にしていることがあるの？」
喜田、司咲を見つめて、
喜田「和雄とは一緒にならないで欲しい」
司咲「何で？何か理由があるの？」
喜田「……」
司咲「和雄はいい人よ。いつも明るく接してくれるし、戦死報告のことだってまだ疑ってるの。なのに何で一緒にならないでほしいって……」
喜田「〈遮るように〉僕があなたのことを好きだからです」
喜田の答えに驚く様子の司咲。

○同・舞台上手袖〈夜〉
身を乗り出すようにして眉間にしわをよせながら見ている花岡。

○〈劇中劇〉同・舞台上・司咲の家
真剣に司咲を見つめる喜田。
喜田「誰よりもあなたを想う気持ちが強いからです！そこに確かな幸せがあるなら、僕は全力で掴みたいと思うんです。……もちろん自分の幸せを押し付けるつもりはありません。でも、もしこのままであなたが傷ついてしまうなら、僕が防ぎたいんです」
感動している司咲。

○同・客席〈夜〉

引き込まれるように舞台を見ている
奈々と隣の初老。

○（劇中劇）同・舞台上・司咲の家
喜田、どうしていいか分からず下手袖
にはけていく。
喜田が下手にはけると上手から慌てる
ように和雄が出てくる。
和雄「どうした。聡が何か言ったのか？」
司咲、和雄の方をゆっくりと振り向き、
司咲「あなたは私を幸せにしてくれるの？」
和雄は少し戸惑うように、
和雄「何言ってるんだよ。あたりまえだろ、
俺は一生お前を幸せにするよ」
司咲「聡よりも？」
和雄「聡……？だからあいつは精神的におか
しくなってるんだよ。またどこかで暴力事
件を起こすかもしれないし、ろくな仕事も
してない。俺はあいつよりも社会的地位も
あるし経済的にも自立してる。お前を幸せ
にするのは俺に決まってるだろ」
司咲、少し考えて、
司咲「（小さく）わかった」
和雄「よし、じゃあもう戸の鍵閉めとけよ。
また聡が入ってきて暴れたら面倒だからな」
司咲、戸を閉めて花岡と一緒に上手袖
へはける。

○同・客席（夜）
奈々、舞台を見ながら怒った表情で、
奈々「ほんとどうしようもない男だわ！」
奈々に同意するように頷く隣の初老。

○同・舞台下手袖（夜）
冷静に舞台上を見ている塚田と榎島。
落ち着かない様子で舞台上を見ている
喜田。
塚田「あと一息だな」
喜田「え、そうなんですか？」

榎島「もう真依子ちゃんはだいぶこっちに傾いてますね」
喜田「いや、でも花岡さんと一緒にはけていきましたよ」
榎島、近くにあった千秋楽お祝いの花束のお祝いメッセージのタグを取り外す。
榎島「恋愛に必要なのは勇気と情熱、あとは少しの奇跡です」
塚田「どんどんアタックしてこい」
榎島「アタックは直球でね」
喜田「（唾を飲んで）……わかりました」
榎島、喜田に花束を渡す。

○（劇中劇）同・舞台上・司咲の家
下手袖から花束を持って出てくる喜田。緊張した表情で戸をたたく。

○同・舞台上手袖（夜）
真依子、舞台上へ出ていこうとするが花岡に腕を引っ張られる。
真依子「ちょっと聡が……」
花岡「任せろ。俺がとどめを刺してやる」
花岡、真依子を制するようにして舞台上へ出ていく。

○（劇中劇）同・舞台上・司咲の家
和雄、戸を開ける。
喜田、和雄の姿に少し驚くが、
喜田「（冷静に）あの、司咲さんは？」
和雄「司咲に何の用だよ」
喜田「司咲さんの気持ちを知りたくて」
和雄「だからあいつは俺と付き合ってるって言ったろ。俺の方がお前より社会的地位もあるし、あいつは俺といた方が幸せなんだよ」
喜田「それを司咲さんの口から聞きたいんです。会わせてください」
和雄「ダメだ」
喜田「なんでですか。居るんでしょ？」

喜田、家の中へ入ろうとする。

和雄「ここには居ねぇよ」

喜田「え、じゃあどこに？」

和雄「それは俺にも分からない。ただ今朝置手紙にしばらく遠くへ行きますって書いてあったんだ」

○同・舞台上手袖（夜）

舞台を見てびっくりする真依子。

○〈劇中劇〉同・舞台上・司咲の家

喜田「ウソでしょ」

困惑する様子の喜田。

和雄「本当だよ。司咲もいきなり死んだと思っていたお前が戻ってきて動揺してたんだろう。少しはあいつを一人にして気持ちの整理をさせてやれよ。それが本当の優しさじゃないのか？」

喜田「そんな……」

喜田、上手袖にいる真依子と目が合う。

和雄「お前の気持ちも分かる。戦争から帰ってきて周りの環境が変わってしまったと戸惑っただろう。でも、それはお前自身が変わってしまったということなんだ。俺と司咲はずっと一緒にいて婚約だって考えてきた。このまま俺と一緒に居ることがあいつにとっての幸せなんだ。わかるだろ？」

喜田、哀しそうに上手袖の真依子を見つめる。

どうしていいか分からず戸惑う様子の真依子。

和雄「あいつはしばらくお前と会うことはないだろう。また帰ってきたら連絡するよ」

喜田「はあ……」

喜田、花束を持ったままとぼとぼと上手袖に戻る。

暗転する舞台上。

○同・舞台下手袖

喜田、下手袖に戻ってくる。

塚田「あの野郎やりやがったな」
榎島「いや、なかなかいい働きぶりですよ恋敵の和雄は。試練がないとラブストーリーは盛り上がりませんから」
喜田「どうしましょう……」
塚田「どうしましょうじゃねぇよ。状況考えたらお前は司咲を探しにいくしかねぇだろ」
喜田「探しにいくってどこに……」
榎島「ただ当てもなく探し続けるんですよ。そして聡と司咲は奇跡の再会を果たし二人は結ばれる。これしかないですね」
塚田「そういうことだ。いけいけ」
塚田、喜田を舞台に押し出すように背中を押す。

○〈劇中劇〉同・舞台上・道
無音でありてもなくさまよい続けている喜田。

○同・舞台下手袖（夜）
インカムをして、舞台上を見ながら焦るように指を噛んでいる塚田。
塚田「〈インカムに〉なんか音ないか！？これじゃ何をしてんのかさっぱり分からん！」
榎島「〈閃いたように〉戦争のSEですよ！」
塚田、目を見開いて、
塚田「〈インカムに〉戦争のSEだ！」
榎島「司咲というゴールが聡の中で戦争時とオーバーラップするんです！」
塚田「〈インカムに〉オーバーラップするんだ！」
榎島「そして司咲の愛を見つけたとき聡の中の戦争はやっと終焉を迎えるんです！」
塚田「〈インカムに〉終焉を迎えるんだ！」

○同・音響ブース（夜）
インカムをした音響スタッフは塚田の指示が何がなんだか分からない様子。戸惑うように隣のアシスタントと目を合わせて、

音響スタッフ「……はい」

○同・舞台下手袖（夜）

インカムをはずして目を合わせる塚田と榎島。

榎島「出会う場所は二人の思い出の場所」

塚田「最初に告白した公園だな」

榎島「はい。でも戦争が終わった今でも変わらない想いを改めて告白するんです」

塚田「そうだな」

塚田、後ろにいた町人役に気づいて、

塚田「お、町人役？行け行け」

町人役「行って何するんですか？」

塚田「とりあえずあいつと肩ぶつけて『どこ見て歩いてんだ！』とか言ってこいよ」

榎島「なるほど。それで社会から孤立してしまっている聡の境遇を表現するんですね！？」

塚田「そんなの知らねぇよ。とにかく今のまじゃ間がもたねぇだろ。ほら、行け行け」

塚田、町人役を舞台に押し出す。

塚田、次に女性スタッフ２を呼び止める。

塚田「おい、真依子呼んできて。速攻」

女性スタッフ２「はい」

○同・舞台上手袖（夜）

舞台上の様子を見ていた真依子、喜田の様子に見かねて舞台上に出ようとするが、花岡に腕をつかまれる。

花岡「お前は出るな」

真依子「どうしてよ。ずっと私のこと探してるじゃない！」

花岡、真依子を強引に舞台裏へ引っ張っていく。

ちょうど入れ違いで女性スタッフ２が真依子を探しにくる。

○同・楽屋口通路（夜）

花岡に引っ張られながらも抵抗する真依子。

真依子「ちょっと離してよ！」

花岡「いいから来いよ。お前は遠くに行ってしまったんだからもう出番はないんだよ。これからは俺があいつを叩きのめす」

真依子「何それ！司咲の気持ちも考えないで、勝手にシナリオ作らないでよ！ちょっとどこ行くの！？」

二人、花岡の楽屋前まで着いて、

花岡「いいか。お前は俺の婚約者だ。誰がどうあがこうと、そのシナリオは変わらないんだよ」

花岡、真依子を自分の楽屋に押し込んで扉を閉める。

そして、近くにあった机で扉を塞ぎ真依子を閉じ込める。

真依子の声「ちょっと！開けてよ！」

扉を叩く真依子。

花岡、鋭い表情で舞台へ戻っていく。

○同・舞台下手袖（夜）

舞台上では戦争のSEが鳴っていて、喜田が町人役から責められている様子。

石垣、舞台の喜田の様子を見ながらナレーションを入れる。

石垣「どこにいけばいい……町の人たちも冷たく、司咲の居場所は掴めなかった」

女性スタッフ2と話す塚田、

塚田「なに！？真依子がいねぇ？」

女性スタッフ「はい。探したんですけど」

塚田、舞台越しに上手袖を見ると花岡の姿が見える。

塚田「あの野郎またやりやがったな」

榎島「もう流石に間がもちませんよ！」

塚田、憤るように舞台裏へ回っていく。

○同・花岡の楽屋（夜）

扉を開けようとしても開かず、諦めるように扉を背にして座り込む真依子。

不意に壁を見上げると上の方に小窓が見える。
真依子、気づいた様に立ち上がり椅子を台にして小窓までよじ登り、建物外へ脱出する。

○同・舞台上手袖（夜）
花岡に詰め寄る塚田。
花岡「だから知りませんよ」
塚田「嘘つけ！お前がどこかに閉じ込めてんだろ！」
花岡「（しらじらしく）閉じ込めるって、何で僕がそんな事を……」
塚田「全員知ってんだよ！お前が勝手にプロポーズしようとしてる事なんかな！」
花岡「いいでしょ。別にストーリーが変わるわけじゃないんだから」
塚田「いいから、真依子どこなんだよ！」

○同・ロビー（夜）
建物入り口から走ってロビーに入ってくる真依子。
ロビーにいた女性スタッフ3、劇場内に走りこもうとする真依子に気づき、
女性スタッフ3「すいません。今は上演中……」
真依子、無視して走り抜ける。
女性スタッフ3、真依子の姿に気づき固まる。
女性スタッフ3「（困惑するように）え……どういうこと？」

○同・舞台上手袖（夜）
塚田、花岡の胸倉をつかむ。
塚田「いい加減にしろテメェ！」
花岡「あんたこそいい加減にしろよ！好き勝手に話変えやがって！」
塚田「何だと！？これは俺の舞台なんだよ！」
花岡「ちげぇよ！俺の舞台なんだよ！」
塚田「うるせぇオラァ！」

もみあいになる二人。

司咲の声「聡！」

動きが止まる塚田と花岡。

○〈劇中劇〉同・舞台上・公園

司咲の声に反応して司咲の姿を探す喜田。

慌てるように上手袖から顔を出して舞台上をうかがう塚田と花岡。

急にざわつき始める客席。

喜田、客席の方を見ると司咲が舞台へ歩いて来ている。

喜田「え……なんで？」

司咲、舞台上へ上がって喜田と対面する。

司咲「私、何が本当の幸せかって気づいてたのかもしれない。でも気づかないふりして、自分にウソついて楽をしてたの。私はこの先どんなストーリーになるか分からないのなら、心から信じられる人と一緒に幸せを掴んでいきたいの。ずっと待ってたよ聡」

驚きを隠せない喜田。

司咲、喜田の手をとる。

司咲「〈小声で〉今は同じ立場だからね」

喜田、真剣な表情をして咄嗟に司咲を引き寄せて抱きしめる。

司咲、少し驚くが受け入れるように喜田に抱きつく。

安心した表情の上手袖の塚田。

喜びを隠しきれていない下手袖の榎島。

ときめいている客席の奈々と隣の初老。

優しい笑顔で司咲を抱きしめている舞台上の喜田。

『バンッ！』と突然の銃声が響く。

司咲、驚いて辺りを確認する。

喜田の後ろに拳銃を構えた和雄の姿。

○同・客席（夜）

舞台を見ながら唖然としている奈々と隣の初老。

○〈劇中劇〉同・舞台上・公園

喜田、和雄の方を振り向いておもむろに自分の体を確認するように触る。状況が整理できない様子の喜田、困惑しながらもゆっくりと床にひざまずき、下手袖の榎島と目があう。どうしようもなく悲しい表情をしている榎島。

喜田、空気を読むようにその場へ倒れこむ。

喜田の元へ駆け寄る司咲。

司咲「聡！聡さん！？」

司咲、和雄の方を睨んで、

司咲「なんで！」

和雄、倒れている喜田の手に拳銃を握らせる。

和雄「いいか。これは自殺だったんだ」

司咲「どういうこと……？」

力ないように拳銃をわざと手放す喜田。

和雄、喜田の手を無理やり広げて拳銃を握らせながら、

和雄「話を元通りにするんだ！こいつは戦争で精神がおかしくなってお前を襲おうとしたから仕方なく俺が殺した。しかし、親友に殺されたというのは悲劇すぎるので、考えた俺たちは聡のためにも俺のこのラブレターを聡の遺書に見立てて聡は自殺したということにする。いいな！？」

和雄、ポケットからラブレターを取り出し喜田の懐に入れる。

唖然としている司咲。

○同・舞台上手袖（夜）

舞台を見て唖然としている塚田。その隣にはスタンバイしている刑事役。塚田、刑事役の方を向いて、

塚田「おい！これなんとかしてくれ！」

刑事役「なんとかって……」

塚田「お前刑事だろ！いいから行け！」

塚田、刑事役を舞台上へ押し出す。

○〈劇中劇〉同・舞台上・公園

刑事役に気づく和雄。

和雄「刑事さん、こっちです」

刑事役、困惑しながらも捜査を始める。

和雄、わざとらしく悲しむように、

和雄「自殺だったんです」

刑事役「自殺……ですか」

司咲、和雄を指さして、

司咲「違います！この人が殺したんです！」

和雄、冷静を取り繕うように、

和雄「仕方ありません。こいつも気が動転してるんです。聡は二人にとって幼馴染でしたから」

刑事役、喜田のポケットから手紙を見つける。

刑事役「これは……」

和雄「遺書……ですか？」

司咲「刑事さん！それは和雄が仕組んだ……」

和雄、咄嗟に司咲に抱きついて喋らせないようにする。

どうしていいか戸惑う刑事役。

和雄、刑事役の方を振り向いて、

和雄「刑事さん。読んでください」

刑事役「あぁ……真依……？」

刑事役、手紙に目をおとすと『真依子さんへ』と書かれていて、不思議に思うように手紙を見返す。

刑事役「〈気を取り直すように〉すいません。じゃあ読ませてもらいます。〈訂正して〉今日でやっと終わりですね。今まで頑張っている姿を陰ながら見てきましたが、本当に大変だったと……」

和雄「〈遮って〉え、何ですかそれ」

刑事役「何って……遺書です」

和雄「いや、そうじゃなくて」

和雄、刑事役のもとへ近づき、手紙が自分のものじゃないことに気づき焦る。

和雄「本当に遺書ですかねこれ」

刑事役「でも遺体のポケットにあったので」
和雄「もっと別のポケットとかも見てみた方が……」
司咲「（遮って）読んでください」
刑事役「え？」
司咲「さっきの続き読んでください。聡さんの遺書なんですよね？」
刑事役「あ、はい」
どうしていいか分からず頭を掻く和雄。
刑事役「本当に大変だったと思います。僕はずっと近くにいるだけで頼りなかったかもしれませんが、あなたと一緒に過ごせた時間がとても幸せでした」
優しい笑顔で聞く司咲。

○〈回想〉喜田の部屋（夜）
机に向かって手紙を書く喜田。
喜田の声「同い年のあなたがこんなに夢に向かってがんばってるのに、僕はいつまでも夢を語ってるだけで自分が情けなく思ってました。でも、この数ヶ月で気づいたんです。和雄みたいにうじうじ待ってるだけじゃダメだって。幸せを掴めるとすればそれは今しかなくて、今言い出さなかったら一生後悔するだろうって」

○〈劇中劇〉演劇ホール・舞台上・公園
手紙を読む刑事役。
刑事役「だから今言います。甘いコーヒーの店を見つけたんで今度一緒に行きませんか？」
怪訝な顔をして手紙を読み終える刑事役。
鼻で笑う和雄。
和雄「なんだよこれ」
刑事役「遺書じゃないんですか？」
和雄「いや、なんですかねその、違う遺書っていうか……」
刑事役「？」

和雄「ほかにあると思うんですよ。ちゃんとした遺書が。この胸ポケットのあたりとか」
和雄、喜田の懐を探ろうとするが、目を閉じたまま懐を抑え微動だにしない喜田。
和雄「きっとこのあたりに。なんだこいつ、クソっ」
刑事役「ちょっと勝手に触らないでください」
司咲「確かに聡さんのものです」
刑事役「え？」
司咲「さっきの手紙。確かに聡さんの文章ですが遺書だとは思いません」
刑事役「なんで」
司咲「私は和雄さんが聡さんを殺すのを見てたからです。それに私は聡さんと甘いコーヒーを飲もうって約束してたんです。聡さんは自分から死ぬような人じゃない。戦争に巻き込まれたって私を探して帰ってきてくれたんだから。またいつかきっと私の元へ戻って来てくれるはずです」
和雄「ちょっと待てよ。お前は俺の婚約者だろ？」
司咲「ごめんなさい。刑事さんこの人を連れて行ってください」
唖然とする和雄。
刑事役「そうですか。それでは署まで同行お願いします」
刑事役、和雄の手を引いていく。
茫然としたまま連れて行かれる和雄。
刑事役と和雄がはけると、司咲は倒れている喜田の元へ近寄り、静かに抱きしめる。
そのときに司咲は無意識に喜田の気管を締め上げてしまう。
喜田「（小さく）ん……」
息ができない喜田。

○同・舞台上手袖（夜）
上手袖に戻ってきた花岡に対してはにかむ塚田。

○同・舞台下手袖（夜）
安心した表情で舞台をみる榎島。

○同・客席（夜）
悲しそうな表情をしている奈々と隣の初老。

○（劇中劇）同・舞台上・公園
苦しそうな表情の喜田。
少しずつ照明が暗くなっていく。
客席からパラパラと拍手が聞こえてくる。

喜田「ゴホッ！」
我慢できず思わず咳き込む喜田。
びっくりする司咲。
急に明るくなる照明。
気まずいように目が合ってしまう喜田と司咲。

司咲「生きてたのね聡さん！」
思い切り喜田に抱きつく司咲。
客席から一斉に拍手が沸き起こる。
幕が降りてくる。

○同・客席（夜）
一緒に立ち上がって拍手をする奈々と隣の初老。
スタンディングオベーションが起こる。

○同・舞台上
幕が完全に降りて一緒に笑いあう喜田と真依子。
下手袖から嬉しそうに榎島が出てくる。
上手袖から拍手をしながら塚田が出てくる。
スタッフも次々に舞台上に集まる。

塚田「トゥ・ザ・ライト・エンディング終了しました！」
みんな笑顔ではしゃぐ喜田と真依子とスタッフたち。

○劇場外・駐車場（夜）

車に荷物を積み込む喜田。

帰りがけのスタッフたちに肩をたたかれはにかむ。

バンッと扉が激しく開く音。

喜田、気になって劇場の方を見ると、関係者口から奈々が足早に出てくる。

その奈々を追うように花岡も出てくる。

花岡「だからちょっと待てよ！」

無視をして歩き続ける奈々。

花岡「こんな形で終われないだろ。考え直せって」

奈々、立ち止まって振り返る。

奈々「いい？戦死報告のあたりで私たちの関係はもう終わってたの」

奈々、再び歩き出す。

花岡「いや、あれは舞台だから」

花岡、奈々を追っていく。

喜田、見て見ぬふりをして再び荷物を積もうとすると、真依子が居ることに気づく。

喜田「あ……お疲れ様です」

真依子、自動販売機で買ったコーヒーを喜田に渡す。

真依子「砂糖とミルク多めにしといた」

喜田「えー美味しいんですか？」

真依子「（はにかんで）飲んでみてよ」

○自動販売機前のベンチ（夜）

ベンチに座ってコーヒーを飲む二人。

真依子「ねえ。いつから持ってたのこの手紙？」

真依子、嬉しそうに喜田のラブレターを見せる。

喜田「え？」

真依子「いつか私に渡そうとしてたの？」

喜田「知りませんよ。和雄が勝手に僕の服に入れたんですよ」

真依子「ウソつき。喜田くんも私を裏切るの？」

喜田「いや、すいません。今日渡そうと思ってずっと持ってました」

はにかむ真依子。

真依子「私楽しみだな。喜田くんが作る舞台」

喜田「まだまだ先の話ですけどね」

真依子「けど絶対作ってね。私の仕事にも関わってくるんだから」

喜田「はい。真依子さんも僕の舞台に出られるよう頑張ってください」

真依子「え、オーディション受けるの私？」

喜田「そうでしょ」

真依子「そこはコネで入れろよ！」

笑いあう二人。

真依子、自動販売機の方を指さして、

真依子「ほら見て！あの人もコーヒーに砂糖多めじゃん！」

喜田「ほんとだ。砂糖ボタンめっちゃ連打してますね」

真依子「ほら。だからみんな甘いコーヒー好きなんだって」

甘いコーヒーを買っていたのは客席にいた初老。喜田と真依子を見て、にこやかに会釈をして去っていく。

終